



作者と作品について

メアリ・ブラッドン「最後の舞台出演」

本篇の原題は「ある女優の最後の出演」(“Her Last Appearance”)で、初出は作者ブラッドン(Mary Elizabeth Braddon)の夫で出版者のマックスウェルが創刊し、彼女自身が編集していた『ベルグレイヴィア』——ハイドパーク南の高級住宅地の名前に由来する文芸誌——の一八七六年クリスマス年鑑号。七七年に、夫が経営するジョン・マックス

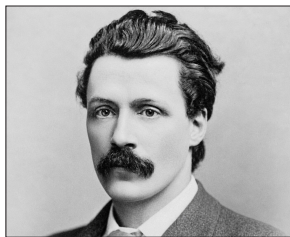
ウェル社から上梓され、恋愛・結婚・家族関係を主題とする三巻本の中篇・短篇集『運命の綾——織り手たちの物語』(Weavers and Weft, and Other Tales)の第三巻に収められた。

ブラッドンは事務弁護士の娘として一八三七年にロンドンで生まれた。五歳の時に両親が離婚したので、自分と母親の生活費を稼ぐために八年ほどメアリ・セイトンという名で地方の舞台に立った。女優をしながら詩や劇も書いていたが、六〇年二月、二五歳の時に作家へ転向する。彼女

を有名にした最初の作品は、「家庭の天使」という神話を揺るがした『レディー・オー
ドリーの秘密』(*Lady Audley's Secret*, 1861-62)である。彼女がマックスウェルと正式に
結婚したのは、精神を病んでいた彼の妻が死んだ一八七四年で、それまで二人は同棲し
ていた。彼女は彼の五人の子供を育てるとともに、自らも六人の子供を産んだ。

ブラッドンは文筆活動においても多作であり、生涯に約八十の小説、九つの劇、数多
くの短篇小説や随筆を書き、歴史小説も手がけた。ウィルキー・コリンズとともに「セ
ンセーション小説」の中心的存在だった彼女は、殺人、自殺、狂気、姦通、脅迫、密告
などを扱った多数の作品を執筆し、それらは主に『ベルグレイヴィア』を通して発表さ
れた。初期の『オーロラ・フロイド』(*Aurora Floyd*, 1863)も人気を博したセンセーシ
ョン小説の傑作で、自立心が旺盛な若い女性を描いた中期の『野生のヴィクスン』(*Vixen*,
1879)は、のちの「新しい女」小説へつながる視点を内包した作品である。「貸本小説
の女王」と呼ばれたブラッドンは、主たる読者層が自分と同じように男性への社会的・
性的従属に不満を抱く中産階級の女性たちであることを認識していた。そのため彼女の
作品には既存の規範を転覆させるようなフェミニズム的な言説がしばしば見られる。

一九一五年、七九歳の時に、当時はサリー州に属していたリッチモンドで、脳出血後
に肺炎を併発し、第一次世界大戦下の混迷とモダニズムの黎明の中で世を去った。



ジョージ・ギッシング「父の罪と子の報い」

本篇の原題は「父の罪」(“The Sins of the Fathers”)で、初出はアメリカの日刊紙『シカゴ・トリビューン』の一八七七年三月一〇日の土曜増刊号。

ギッシング (George Robert Gissing) は一八五七年にイングランド北部ヨークシャー州のウェイクフィールドで薬剤師の長男として生まれた。彼が最初に読破した小説は知的な父親が購読していたディッケンズの『骨董屋』(The Old Curiosity Shop, 1840-41)である。彼は敬愛するディッケンズの批評書や作品の序論を書いているが、虚構世界のディッケンズ

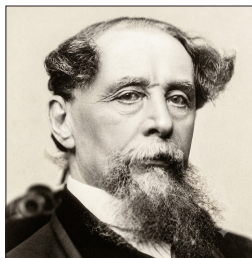
と現実世界の父親とが、学者を目指していた当時の少年の心の中で、メンターとして重なっていたことは想像にかたくない。

秀才の誉れが高かったギッシングは、十五歳の時にオーエンズ・カレッジ(現在のマンチェスター大学の前身)に入學し、古代と現代の言語や文学で高い能力を示した。しかし、十八歳の春、貧乏学生として孤独な下宿生活を送っていた時に、性的欲望に抗えず十七歳の街の女(のちに彼の最初の妻となる)ネルと関係を持つ。その後、彼女を更生させようとして友人の金

品を盗んで逮捕され、大学から放校処分を受けてアメリカに逃亡した。アメリカに渡ったギッシングは生活に困窮して文筆活動を始める。飛び込みで訪れた『シカゴ・トリビューン』の主筆に頼み、なけなしの金でペンとインクと紙を買って、二日で書き上げたのが本短篇集の「父の罪と子の報い」である。

労働者階級の悲惨な貧困の場面を活写した前期作品群では、『無階級の人々』(*The Unclassed*, 1884)と『どん底の世界』(*The Nether World*, 1889)が有名である。舞台を中産階級に移した中期以降の代表作としては、一八七〇年の初等教育法以後の文学の商業化を批判した『三文文士』(*New Grub Street*, 1891)‘科学的合理主義と伝統的信念の対立を論じた『流謫の地に生まれて』(*Born in Exile*, 1892)‘フェミニズムの古典として名高い『余計者の女たち』(*The Odd Women*, 1893)‘多種多様なトピックを選んで鋭い人生批評や独特の美学を平明な文章で綴った随筆で、昔から日本でも愛読者が多い『ヘンリー・ライクロフトの私記』(*The Private Papers of Henry Ryecroft*, 1903)などがある。

ギッシングはネルの死後もまた性衝動に駆られて労働者階級の女性と結婚した。どちらも不幸な結果となったが、晩年は中産階級の知的なフランス女性と暮らすことができた。一九〇三年(四六歳)の暮れに慢性の肺炎が悪化し、ピレネー山脈の避寒地で不帰の客となる。



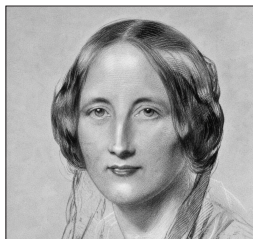
チャールズ・ディケンズ「教会庶務係の純愛」

本篇の原題は「教会庶務係——真実の愛の物語」(“The Parish Clerk: A Story of True Love”)で、初出はチャップマン・アンド・ホール社から月刊分冊で刊行されたディケンズ(Charles John Huffam Dickens)の最初の小説『ピクウィック・クラブ』(*The Pickwick Papers*, 1836-37)の第一七章にある挿話。この物語は、病床に伏した主人公ピクウィック氏が、自ら整理した話をクラブの会員に語り聞かせるという形をとっている。

ディケンズは一八二二年にイギリス海峡に面した都市ポーツマスで生まれた。ロンドンで過ごした幼少期に父が借金不払いで投獄されたため、靴墨工場で悲惨な労働を経験させられ、そのトラウマが彼の人生に深刻な影響を与えた。やがて彼は速記術を習得して新聞社の議会通信員になる一方で、ロンドンの風物を題材に小品を書き始め、それをまとめた『ボズのスケッチ集』(*Sketches by Boz*, 1836)で好評を博した。本篇が収められた『ピクウィック・クラブ』で有名作家となったディケンズは、『オリヴァー・トウィスト』(*Oliver Twist*, 1837-39)や『クリスマス・キャロル』(4

Christmas Carol, 1843) とった前期作品群で個々の社会悪を摘発し、人道主義的な社会改革を唱えたが、後期作品群では複雑な社会システムそのものへの批判を強めた。『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53)、『リトル・ドリック』(*Little Dorrit*, 1855-57)、『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61)、『互いの友』(*Our Mutual Friend*, 1864-65)では象徴的な技法がとられ、前期の樂觀的な雰囲気になわって悲観的な色彩が濃くなっている。

ディケンズの作品の多くは連載形式による読者との緊密な関係の中で形成され、笑いと感傷、写実と諷刺を交錯させる語りは、十九世紀英国小説の発展に決定的な影響を与えた。彼は、雑誌編集者としても精力的に活動し、貧困や教育などの社会問題について積極的に発言することで、ヴィクトリア朝を代表する文化的指導者となった。慈善活動にも熱心で、貧困救済や教育改革を支援し、社会的弱者の境遇改善に尽力した。また、公開朗読を通じて読者と直接交流し、国際的な名声を獲得したことで、十九世紀の大衆文学と社会改革運動を結びつける象徴的存在となった。しかし、家庭生活では妻キャサリンとの性格の不一致から別居し、素人演劇で知り合った年下の女優、エレン・ターナンと秘密の関係を続けた。晩年は公開朗読に熱中するあまり、その疲労とストレスから体を壊し、推理小説『エドウィン・ドルードの謎』(*The Mystery of Edwin Drood*, 1870)を未完成のまま、一八七〇年にケント州の邸宅で五八年の人生を終えた。



エリザベス・ギヤスケル「雨降って地固まる」

本篇の原題は「父の罪」(“The Sin of a Father”)で、初出はディケンズが編集長を務める週刊誌『ハウスホルド・ワーズ』の一八五八年一月二七日号。この原題は、執筆者をすべて匿名とする方針をとっていた編集長のディケンズが、独断で変更したものである。しかし、作者ギヤスケル (Elizabeth Cleghorn Gaskell) は、六〇年に短篇集に収録してスミス・エルダー社から出版する際に、当初の予定に従って「雨降って地固まる」(“Right at Last”)に改題した。このように変更したのは、物語の推理的な側面よりも「正直は最善の策」という道徳的な教訓に重点を置きたかったからである。

ギヤスケルは、一八一〇年にロンドンのチェルシー地区で、ユニテリアン派の牧師の娘として生まれた。生後すぐに母を亡くし、マンチェスター南部の田舎町ナッツフォードに住む伯母に引き取られて育てられる。この幼少期の町は、彼女の代表作『克蘭フォード』(Cranford, 1851-53)の舞台となっている。

三二年、同じユニテリアン派の牧師ウィリアム・ギヤスケルと結婚し、夫の救貧活動を手伝っていたが、待望の長男を猩

紅熱で失った。その悲しみを紛らわすために執筆した最初の長篇小説『メアリ・バートン』(Mary Barton, 1848)は、新興産業都市マンチェスターの労働者の悲惨な生活を描いた社会問題小説である。他の社会問題小説としては、「堕ちた女」をテーマにした『ルース』(Ruth, 1853)、都市と田舎や労資の対立を描いた『北と南』(North and South, 1854-55)がある。また、ナポレオン戦争時の強制徴募隊を描いた歴史小説『シルヴィアの恋人たち』(Sylvia's Lovers, 1863)、伝記『シャーロット・ブロンテの生涯』(The Life of Charlotte Brontë, 1857)、円熟した家庭小説『妻たちと娘たち』(Wives and Daughters, 1864-66)など、ギャスケルは幅広いジャンルの作品を手がけている。彼女はまた長篇と並行し、約四十もの多彩な短篇小説を執筆した。ディケンズは、その尽きせぬ物語力を讃えて彼女を『千夜一夜物語』の語り手になぞらえ、「親愛なるシェヘラザード」と呼んだ。これらの短篇は、ゴシック風の怪奇と幽霊譚、推理趣向の謎解き、ユーモラスな恋愛喜劇から社会派に至るまで広い領域に及んでおり、多くは弱者への共感と人間性への信頼に基づいて、過ちを犯した者や不条理な運命に翻弄される人々に寄り添う温かな眼差しに満ちている。

一八六五年、ハンプシャー州の邸宅で三人の娘たちとアフタヌーン・ティーを楽しんでいる最中に、心臓発作のため五五歳で急逝した。



ウィルキー・コリンズ「船長と島の妖精」

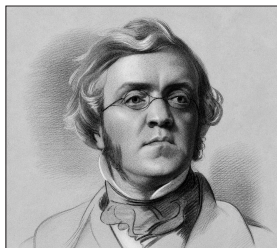
本篇の原題は「船長の最後の恋人」(“The Captain’s Last Love”)で、初出はニューヨークの週刊紙『時勢』の一八七六年一月二三日号。翌年、ロンドンの文芸誌『ベルグレイヴィア』の一月号に「船長と妖精」(“Mr. Captain and the Nymph”)というタイトルで掲載され、さらに本篇を含む十四の作品が短篇集『小さな物語』(Little Stories, 1877)に収録された。収録作品の多くは恋愛や結婚をテーマにしており、階級の壁(本篇の場合は人種の壁)を超えた恋愛が扱われている。コリンズ(William Wilkie Collins)が南太平洋

を舞台に設定したのは初期の未発表作品、キリスト教伝来以前のタヒチを描き、ウィリアム・エリスの『ポリネシア研究』を主要典拠とした『イオラニ』(Iolani)以来のことで、ここでは絶大な権力を持つ神官やエイマータという女主人公だけでなく、風景描写にも本篇との類似点が見られる。

コリンズは有名な風景画家の長男として一八二四年にロンドンで生まれた。紅茶輸入業を営む商店で徒弟奉公したあと、四六年からリンカーンズ・イン法学院で学んだが、

弁護士になる意思はなかった。四七年に父が死去すると、その翌年に父の伝記を執筆して文才を示した。そして、五一年に素人演劇での共演を契機にディケンズと知り合い、彼の週刊誌『ハウスホルド・ワーズ』に寄稿するようになり、五六年以降は同誌の編集に携わる。コリンズは生涯を通じて二人の女性と同時に家庭を築き、双方との間に子供をもうける一方で、女性の境遇や社会的弱者への共感を一貫して示しており、この姿勢は恋愛小説や社会的関心を扱う諸作に反映されている。晩年は小説の質が低下し、健康を害してアヘンに手を出すこともあった。

巧みな物語手法で込み入った筋と怪奇な事件が絡む小説を書いたコリンズは、推理の知的側面には関心がなく、むしろ不可解な事件や複雑な状況の漸進的解明に興味を抱いていた。生涯で二十余りの長篇小説と七冊の短篇集を残したが、代表作としてはディケンズの後継誌『オール・ザ・イヤ・ラウンド』に連載され、独創的かつ魅力的な悪漢フォスコ伯爵が登場する『白衣の女』(*The Woman in White*, 1860)と、黄色のダイヤモンドをめぐる事件でカフ巡査部長が活躍するイギリス最初の探偵小説の一つ、『月長石』(*The Moonstone*, 1868)がある。コリンズの弟で画家のチャールズはディケンズの娘ケイトと結婚している。コリンズ自身は、痛風と関節炎を患い、一八八九年に脳卒中のためロンドンで没した。



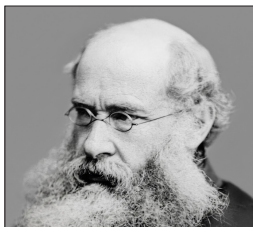
W・M・サッカレー「軍医補の恋女房」

本篇の原題は「デニス・ハガティの妻」(“Dennis Haggarty's Wife”)と、初出は『フレイザーズ・マガジン』の一八四三年一〇月号(観察者としての架空の語り手ジョージ・フィッツブルードル名義で掲載)。五二年に、本篇と同じ語り手による二作品を加えた三部構成の『夫たちと妻たち』(Men's Wives)が、著者の許諾を得ない海賊版としてニューヨークのアップルトン社から出版された。作者サッカレー(William Makepeace Thackeray)は、破産や家庭の崩壊を経験したことで、華やかな社交界の虚飾に敏感になり、生涯にわたり「観察者」としての立場を自覚していた。この姿勢が、人物の欲望や利害の動きを冷静に見つめる語りの調子を生み、上流社会の恋愛観や結婚観に対する懐疑的な眼差しを支えている。

サッカレーは、イギリス東インド会社の支配下にあった当時のカルカッタ(現在のコルカタ)で一八一一年に生まれた。東インド会社の徴税官であった父が熱病で亡くなると、彼は六歳でイギリスへ送られ、紳士教育のためにパブリック・ス

クールで学んだ。だが、なんとかケンブリッジ大学に進学したものの、飲酒やギャンブル癖などが原因で中途退学する。その後、法曹界を目指してロンドンの法学院に入學するが、二一歳で父の遺産を相続すると法律の勉強をやめてしまい、パリに渡って芸術活動に勤しむ。そこでイザベラ・シヨールという女性に出会って結婚し、三人の娘をもうけた。しかし、妻が重度の鬱病を患って精神病院に収容されたので、彼は家庭生活で苦行を強いられる。父の遺産も銀行の破綻で失うと、彼は怠惰な生活を改め、ジャーナリストとして様々な雑誌に寄稿するようになった。

産業革命による富と権力の再分配が伝統的な社会規範を揺るがしている様子を鋭く批判した『イギリス俗物誌』(*The Book of Snobs*, 1846-48)は、「スノップ」という言葉の現代的意味を広めることになる。上流階級を痛烈に批判した次作『虚栄の市』(*Vanity Fair*, 1847-48)は大成功を収めて、サツカレーの作家としての地位を確立した。彼は同時代のディケンズとしばしば比較され、人気や評価をめぐって複雑な対抗意識を抱いていたことが知られ、そのような自負と競争意識は、彼独特の鋭い諷刺精神を支える一因となった。一八五七年に議会選挙に出馬したが落選。講演旅行で二度アメリカを訪れ、晩年は六〇年創刊の『コーンヒル・マガジン』の編集長を務めた。暴飲暴食と運動不足がたたって健康が次第に悪化し、六三年に五二歳で脳卒中によりロンドンで死去。



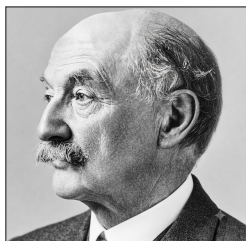
アントニー・トロロップ「翻意した牧師の娘」

本篇の原題は「オクスニー・コウンの牧師の娘」(“The Parson's Daughter of Oxney Colne”) で、初出は文学・政治・社会問題を扱った月刊誌『ロンドン・レビュー』の一八六一年三月号。二年後にチャップマン・アンド・ホール社から出版された短篇集『すべての国の物語』(Tales of All Countries)の第二シリーズに収録された。本篇は日常生活の一場面を題材としながら人間関係の綾を巧みに織り成しており、その筆致には恋愛と結婚をめぐる繊細な心理描写と地方社会に対する穏やかな諷刺精神がよく表れている。

トロロップ (Anthony Trollope) は架空の地方、バーセットシャーを舞台とする一連の小説「バーセットシャー年代記」の作者として知られている。生涯に四七の小説、四二の短篇小説、五つの旅行記、そして小説家サッカレーと政治家バーマストン卿の伝記を上梓した。死後出版の『自叙伝』(An Autobiography, 1883) はベストセラーとなったが、時計を前にして一五分間に二五〇語の割合で書くという毎日の執筆ノルマや金銭目的について率直に記したことで、彼の文学的才能に関しては批評家たちの不信を招いた。

トロロブは、地主階級の出身で弁護士だった父トマスと小説家・旅行作家の母フランシスの三男として、一八一五年にロンドンで生まれた。一家で移ったベルギーで助教師をしていた時に、彼はイギリスの郵便局の事務職に就くことが決まり、三四年にロンドンに戻る。七年後にはアイルランドで郵便調査官補佐となり、そこで銀行家の娘ローズと出会って結婚、二人の息子をもうけた。五一年、トロロブはイングリッド南西部と南ウェールズの地方郵便配達の調査と再編成を任される。その際にソールズベリー大聖堂を訪れたことが契機となり、六部作からなる「バーセツトシャー年代記」の第一作『養老院長』(*The Warden*, 1855)の構想を思いついた。続く『バーチェスターの塔』(*Barcheester Towers*, 1857)と『フラムリー牧師館』(*Framley Parsonage*, 1861)では、主に聖職者や地主階級を描き、作家としての地位を確固たるものにした。

一八六〇年代半ばに、トロロブは郵便制度の改革に携わり、今日では当たり前となった街頭郵便ポストの普及や地方郵便制度の整備に尽力し、近代的な郵便網の発展に貢献した。このように郵便行政官としても有能で、郵便局内でかなり高い地位まで昇進したが、六七年に郵便局の職を辞した。翌年、自由党から国會議員に立候補するが、落選後は完全に作家活動に専念した。八二年、ロンドンのクラブ街ペルメルで食事中に脳卒中のため、六七歳で他界。



トマス・ハーディ 「巡回裁判中の数奇な恋」

本篇の原題は「西部巡回裁判の途上」(“On the Western Circuit”)で、初出は二つの雑誌、米国の週刊誌『ハーパーズ・ウィークリー』の一九一一年一月二八日号と英国の月刊誌『イングリッシュ・イラストレイティッド・マガジン』の二月号。この作品は、九四年にロンドンのオズグッド・マクルヴェイン社から出版された短篇集『人生の小さな皮肉』(Life's Little Ironies)に収録される際に、作者ハーディ(Thomas Hardy)によって大幅に修正されているが、階級差と恋愛感情の錯誤が連鎖し、偶然と誤解が人の運命を左右するという、ハーディ特有の悲劇的構造を典型的に示している点で変わりはない。

ハーディは一八四〇年にイングランド南西部のドーセット州の小村で生まれた。この土地は彼の小説や詩の舞台となる「ウェセックス」の一部を形成している。子供時代は母の影響で本人が「生まれながらの本の虫」と称するほど文学に熱中したが、十六歳で学者や聖職者の道を断念し、地元の建築家のもとで徒弟修業を始める。そして、二二歳になるとロンドンへ移って建築の仕事しながら、ドーセット方言で詩を書

いたウィリアム・バーンズに感銘を受け、自らも詩作に没頭する。

二七歳の時に初めて書いた小説は出版を諦めたが、一八七二年に発表した『緑樹の陰』(*Under the Greenwood Tree*)でようやく三十ポンドの報酬を得る。さらに、二年後の『遙か群衆を離れて』(*Far from the Madding Crowd*)では商業的にも批評的にも成功を収め、その後も『帰郷』(*The Return of the Native*, 1878)、『キャスタブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*, 1886)、『ダーバヴィル家のテスト』(*Test of the d'Urbervilles*, 1891)、『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*, 1894-95)など、芸術性の高い作品を生み出した。

ハーディの小説の多くは悲劇的な結末を迎えるが、本人は悲観主義者でないと主張していた。彼はキリスト教の信仰を捨て、ダーウィンの進化論を受け入れ、哲学者ショーペンハウアーの影響を受けた。世界を動かすのは神のような存在ではなく、無意識で盲目的な力であるとする「内在する意思」の概念を作品世界で提示し、これが彼の思想的な中心概念となった。最後の長篇小説『日陰者ジュード』が道徳的非難を浴びると、以後は若い頃に熱中していた詩作に専念する。代表作である劇詩『霸王』(*The Dynasts*)では、ナポレオン戦争を舞台に、人間の営みを超えた巨大な力に翻弄される歴史と運命が描かれ、小説と共通する世界観が壮大なスケールで展開されている。一九二八年にドーセット州の自宅で心不全のため永眠。



ジョージ・エジャトン「小さな灰色の手袋」

本篇は原題も「小さな灰色の手袋」(“A Little Grey Glove”)で、一八九三年にボドリー・ヘッド社から出版されたエジャトン(George Egerton)のデビュー作である短篇集『女性の基調』(Keynotes)に収められている。この作品は、同じ短篇集の他作と比べると、男性の語り手による抒情的な描写が際立ち、固有名を持たない女性像という共通要素を保ちながらも、より穏やかな雰囲気をもつ点で特異な位置を占めている。

ジョージ・エジャトンは筆名で、本名はメアリ・ダン(Mary Elizabeth Annie Dunne)。一八五九年にオーストラリアのメルボルンで生まれ、成長期の大部分をアイルランドのダブリン周辺で過ごす。十代前半にドイツで二年間の教育を受け、語学と芸術の才能を開花させたが、十四歳の時に母が亡くなって姉妹の世話に追われ、芸術家になる夢を諦めて看護師の訓練を受ける。

一八八八年、二十歳以上も年上の既婚者である牧師と駆け落ちし、離婚後の彼とアメリカのデトロイトで結婚したが、その翌年に夫は亡くなった。九一年、冒険家・作家のエジャ

トン・T・クレアモントと再婚し、彼の名前を筆名として用いるようになった。その後、九二年にアイルランドに夫とともに移住し、文筆によって生計を立てるために短篇小説を書き始める。

エジャトンは、一八八〇年代後半に二年間を過ごしたノルウェーで、近代フェミニズム戯曲のバイオニアと言われる『人形の家』の作者、イブセンから強い影響を受けていた。そのため、女性の教育や自由、経済的自立を主張した彼女のデビュー作『女性の基調』と次作の『不協和音』(Discords, 1894)は、「新しい女」現象が最高潮に達していた九〇年代前半のイギリス社会において、とりわけ批評家たちの間で大きな注目を集めた。ハーディは『日陰者ジュード』のスー・ブライドヘッドのような、自由奔放で強い自己主張を持つ女性像について、エジャトンの作品の影響を認めていた。また、彼女の作品に特徴的な鋭い心理描写、革新的な語りの技法、実験的な表現はジョイス、ウルフ、ロレンスらのモダニズム文学の先駆けとして評価されている。

エジャトンは、二度目の結婚から十年後に離婚し、一九〇一年に十五歳年下の演劇批評家と三度目の結婚をした。本人も演劇作品の執筆や翻案に取り組んだが、観客や批評家からは手厳しい評価を受けた。一九四五年、八五歳の時に動脈硬化症のためサセックス州の自宅で息を引き取った。